全中道研会報

令和８年８月31日　第２号
全日本中学校道徳教育研究会
https://www15.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=1350010

令和8年度
道徳教育推進教師育成講座

令和８年度の道徳教育推進教師育成講座を令和８年８月１日（土）、２日（日）の二日間にわたり、上廣倫理財団ＵＦホールを会場に実施しました。北は北海道、南は沖縄県にわたり全国各地から道徳教育の推進に携わっている先生方（総勢３１名）にご参加いただきました。全体研修会とグループ別研修会を通して、特別の教科　道徳（以下：道徳科）の授業力向上に向けた研修を実施しました。グループ別研修では５グループに分かれ、学習指導案を作成しました。

８月１日(土)
・開講式
・研修Ａ　講演
　学習指導案づくりについて
　日本女子大学 講師 菅野由紀子 先生
・研修Ｂ･Ｃ　班別指導案作成
８月２日（日）
・研修Ｄ　模擬授業準備
・研修Ｅ･Ｆ　グループ発表、模擬授業
・研修Ｇ　指導・講評・発表総括
　日本女子大学 講師 菅野由紀子 先生
・研修Ｈ　講演
　考え、議論する道徳科の充実に向けて
　国立教育政策研究所教育課程調査官
　文部科学省初等中等教育局教科調査官
　大平 剛生 先生
・閉講式

１　全体

研修Ａと研修Ｇでは、日本女子大学 講師 菅野由紀子 先生に「学習指導案づくりについて」「グループ発表総括・道徳教育推進教師に望むこと」をテーマに、ご講演をいただきました。道徳教育推進教師として、日頃の道徳授業への向き合い方や校内で道徳教育を推進していくヒント、そして明日から使える指導方法まで幅広くご指導いただきました。研修Ｈでは、文部科学省教科調査官の大平 剛生 先生に、「考え、議論する道徳科の充実に向けて」を演題として、ご講演いただきました。学習指導要領改訂のポイントや全国の具体的な実践、そして令和の日本型学校教育から発達の段階に応じた小学校・中学校・高等学校の体系的な指導まで、多岐にわたってご指導いただきました。

研修Ｂ・Ｃ・Ｄでは、受講者が事前課題として、教材「二通の手紙」の内容分析を行い、作成してきた事前課題をグループ内で共有するとともに、その後のグループでさらに教材を研究しました。グループ内での教材分析の議論を踏まえ、学習指導案作成に向けた検討を行いました。各グループが、導入や展開、終末に至るまで細かな工夫を行っていたことに感心しました。





二日間にわたるグループ協議は、内容項目、主題、中心的な発問や指導過程について、難しい内容まで踏み込んで検討を重ねていました。最終日に行われた模擬授業（20分）質疑応答（10分）では、各グループとも、目的を焦点化して発表していました。一般的な授業展開とこのメンバーで新たに考えた展開とをミックスさせて指導案を作っていました。そのような体験ができた本講座の果たす役割と効果は大きいと考えます。受講者アンケート（「４」に掲載）からも「たいへん勉強になった」「今までと違う視点で考えることができた」などの意見があり、大変有意義な時間になったことが伺えました。また、今年度も、受講者にタブレットやパソコン等端末をご持参いただき、資料のペーパーレス化、共有フォルダの活用等を行いました。

ご指導いただきました文部科学省教科調査官 大平剛生先生、日本女子大学講師 菅野由紀子先生、顧問・参与の皆様、受講者を推薦していただきました理事、当該校の校長先生方など関係者の皆様に、改めまして御礼申し上げます。（事務局）



２　開講式・会長挨拶

本日は、ご多用の中、本講座にご参加いただき、誠にありがとうございます。皆様は、日頃から全国各地で道徳教育の充実と発展にご尽力されている先生方であり、その熱意と使命感に深く敬意を表します。まず、令和８年度熊本地震に際し、被害に遭われた方々に心よりお見舞いを申し上げます。先日、熊本県中学校道徳教育研究会会長、熊本市立河内中学校校長　田代めぐみ先生に全中道研からお見舞金をお送りいたしましたので、この場をお借りしてご報告させていただきます。一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

さて、道徳教育WGの取りまとめ案が公開され、次期学習指導要領の方向性が見えてまいりましたが、現行の学習指導要領の骨組みの維持、考え、議論する道徳の実装のフェーズへの移行、深さ志向、多様性志向、各教科等との連携志向といった改訂の基本的な考え方などについての議論が示されました。価値の実現や価値の対立をめぐる葛藤、複数時間と複数内容項目、深める教材などの議論については、本育成講座でも研究を深めていく機会になればよいと考えています。講義や演習を通して、道徳教育に関する知識や指導技術を習得し、各地域の２学期からの教育活動に活かしていただければ幸いです。本講座が、皆様にとって有意義な学びの場となり、道徳教育の推進に貢献できることを願っています。

最後になりますが、本講座の開催にあたり、ご尽力いただきました上廣倫理財団の皆様、講師の菅野由紀子先生、文部科学省教科調査官　大平剛生先生に、心より感謝申し上げます。



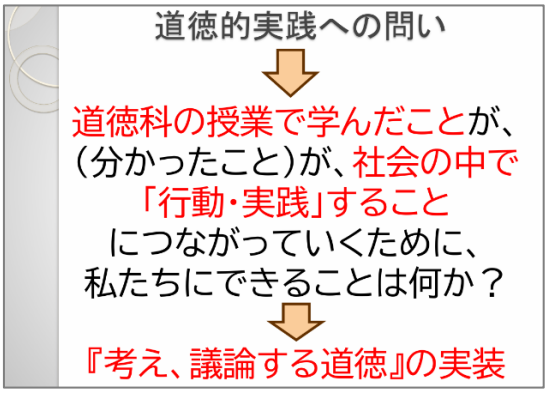
道徳教育推進教師育成講座〈研修A～H〉

３　研修Ａ

講演　学習指導案づくりについて

講師　日本女子大学 講師 菅野由紀子 先生

コロナ禍を契機に端末にデジタル機器の活用が急速に進み、今後は生成ＡＩをどのように授業へ取り入れていくかが各教育現場の課題となるお話がありました。使い方の多様化が進む中で、まさに生成ＡＩとどう向き合うかが問われている時代だと思います。また、これからの社会は「ＡＩとの共存」が不可欠であり、子供たちがＡＩとどう関わりながら豊かな人間性を育んでいくかが教育の大きな課題であります。また、道徳教育の実装とは、どのようなものかというお話もありました。一部の先進的な学校や研究校の取組にとどめず、全国のすべての学校、すべての教室で「主体的に考え、対話する道徳授業」が行われている状態を作ることが「実装」の本当の意味だと考えています。そのうえで、道徳教育推進教師や研修リーダーが核となり、その先生方には、自校や地域全体へその学びを広げていく役割が期待されています。道徳科の授業構造と学習指導案づくりのポイントでは、教材「二通の手紙」を題材とした授業づくりについて、中心となる道徳的価値やねらいを明確にすることが大切です。



内容項目を焦点化しつつ、他の観点も検討しどこに重点を置いた授業を展開するか、そして「ねらい」を明確にするということも重要であると説明がありました。

○　指導案作成のステップと発問の工夫

１．ねらいの設定

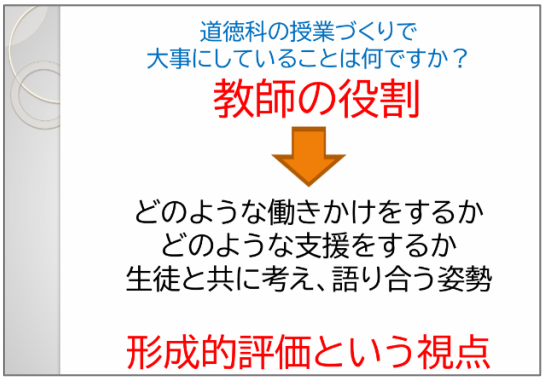
２．指導の重点化

３．多角的な教材解釈（教材研究）

４．学習指導過程の構想

（生徒同士、生徒と教師の議論）

５．中心発問と展開発問の検討



また、授業中に生徒の思考を高め、授業の質を変える鍵として「形成的評価」の考え方について説明がありました。生徒の考えの変容や捉え方を把握し、教師のその場での一言、発問、補助発問、問い返しによって学びをより高精度に支援するということです。道徳科で育んだ道徳性を基盤とし、実践と密接に関連させることで、学校教育全体で道徳性を育む構造を確固たるものにしていくことが、大切であるというお話で結びました。



４　研修Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ

各研修で、作成した学習指導案を「共有フォルダ」上にアップロードして、参加者は持参したタブレット端末等の画面上で各グループが作成した学習指導案を確認しました。直前まで修正が入る可能性があったため、電子化は大変有効でした。模擬授業については、グループごとに導入・展開・終末のいずれかを選択し、実施しました。終末では、持参した教材を活用したグループもありました。参加した受講者３１名に事務局を入れて４０名ほどの会場でしたが、時に事務局も生徒役になり、授業者役は緊張しながらもいつも通りの授業になるように努める姿が見られました。

５　研修Ｇ

講演　グループ発表総括

講師　日本女子大学 講師 菅野由紀子 先生

はじめに、教材『二つの手紙』の主人公・元さんの行動には、姉弟に対する思いやりや人間愛が根底に存在することに触れ、授業においてはこの心情に触れる際、単に「ルール違反だから悪である」と断罪するのみでは、生徒の葛藤や心の揺れを汲み取ることはできないというお話がありました。一方で、心情のみに共感して規則の形骸化を許容すれば、授業の焦点がブレてしまい、授業が単なる平面的な流れになってしまうため、規則遵守から人間として大切にしたい生き方へと「重層的」な立体構造で捉えるという説明がありました。また、教師は「シェフ」のように、生徒から出た多様な意見・素材をうまく調理し、提供する役割が求められます。

【Ａグループ】

実践では、イラストの挿絵を効果的に活用し、平面的な板書を華やかに、かつ生徒の理解を助けるものにした。可視化の工夫として、「心メーター（グラフ）」を用いて、揺れ動く心情を可視化した。独自の展開で授業の終盤で「特別に姉弟を入れた元さんの判断はどうだったか」を改めて問うた。これはフラットな状態で行うよりも、深い議論を経てから問うことで、より多角的な視点を引き出す価値のある試みであった。視覚資料（差し絵や心情メーター）の活用は、生徒の直感的理解を助ける上で極めて有効である。事前アンケートで「自分なら姉弟を入れるか」を調査したり、授業中の意見を集計したりすることで、効率的に考えを可視化できる。振り返りの方法として、授業の最後に「元さんへの手紙」を書くという手法は、生徒が自分自身を振り返り、道徳的成長を実感させるために有効である。



【Ｂグループ】

１つの教材を２時間で扱うという挑戦を行いました。２時間目では、感謝の手紙と懲戒処分の手紙という相対する手紙に心揺れる元さんの心情を扱った。懲戒処分の通知を「握りしめる」場面を実際に演じる（動作化）ことで、元さんの非を認めた気持ちや、強い決意を生徒自身に実感させる内容でした。１教材２時間扱いは、単時間の枠を超えた発展的思考を促す効果があります。役割演技を行った際、演じた生徒の感想のみで終始せず、「周囲で見守っていた生徒がその動作から何を感じ取ったか」を全体に波及させることも大切。元さんが二つの手紙を机上に並べた行為は、「自らの非を噛み締め、過去を乗り越えて新たな出発を決意した」象徴的な動作として捉えさせることもできます。

【Ｃグループ】

元さんの心情変化を追い、規則に対する道徳的実践意欲と態度の育成を目指しました。ファシリテーターから「教師は役者である」という視点が示され、大きなリアクションで授業を活性化させました。深まりの工夫として、単に自分の意見を述べるだけでなく、「他人の意見を聞いてどう思ったか」を問うことで、考えの比較や変化を促していました。グループワークの意義は単なる意見の集約ではなく、他者や他班の意見を聞いた生徒に対し、「その意見を聞いて自分自身の考えはどう変わったか」を問うことが思考の深まりを生んでいきます。また「その場しのぎの優しさ」「無責任な判断」という言葉は、生徒に強いインパクトを与えるので、板書上で色つけや赤丸囲みを行うなどの視覚的強調（意識化）を行うことが効果的だと感じました。



【Ｄグループ】

「きまりを考えること」を通して、思いやりと規則遵守を関連付ける指導を中心としました。若手の先生が中心となり、フレッシュな語り口で、授業を展開しました。生徒の「ルールを守ることは大事だ」という発言を「改めて気づいたことは何か」と深掘りしたことで、規則を守ることは、姉弟だけでなく、残業や責任を負う「職員」、最悪の事態を免れた「母親」、そして「元さん自身」の未来を守ることにつながるという指導になりました。「〜を守ることにつながる」という気付きを引き出した点は非常に良好な取組でした。ここから、さらに指導者が「なぜルールを守ることが母親や職員を守ることになるのか？」と追加の「なぜ？」を生徒たちへ問うことが重要です。例えば、事故が発生した場合の保護者の絶望、残業や過怠責任による職員への負荷などを生徒自身に語らせることで概念的理解から実質的理解へと思考が深まります。

【Ｅグループ】

規則の意義を深く理解し、進んで守ろうとする態度を育てることを軸に授業を展開しました。 元さんが、結果を待つ間の「心配、後悔、不安、焦り、祈り」という複雑な心情を、短冊を用いて視覚的に言語化しました。心情を丁寧に扱うことが、終盤の「この年になって初めて考えさせられたこと」という発問への納得感につながりました。授業の展開が、重層的に構築されていました。板書におけるキーワード整理が明瞭であり、生徒の発話を引き出す構造が優れていました。終末の段階においては、「今日の感想」という 抽象的な提示ではなく、抽出された心情キーワードの「後悔」や「祈り」と「今後の自分の生き方」を結びつける具体的な問いを設定することで、学習の効果がさらに高まっていきます。



【全体総括】

道徳科授業におけるデジタルツールの活用や一人１台端末での事前・事後アンケートなどを活用することで意識化につながります。導入段階においては、端末を用いて「あなたが元さんの立場なら、閉園後に姉弟を特別に入園させるか」という意識調査を瞬時に集計・可視化する手法も効果的です。事前に生徒の傾向を把握しておくことで、授業中の発問構成を柔軟に調整することが可能となります。元さんの行動や心情の推移を、黒板やデジタルモニター上の数直線上・時系列に配置して整理するアプローチがあると登場人物が置かれた状況と規則との板挟みを客観的に把握させることができ、思考の整理を手助けとなります。また、役割演技の応用として、ペアワークを導入し、「園長役」と「元さん役」を設定し、対話を行わせることも効果的です。園長役は「なぜ規則を守らねばならないか」という組織的・社会的立場から理由を語り、元さん役は「なぜ入園させたか」という個人的心情を語らせることで、立場による価値観の違いや規則の必要性を立体的に理解させることができます。

現代社会は、ＡＩやロボティクスの飛躍的発展に伴い、急速な変革の渦中にあります。かつて予測された「将来存在しなくなる職業」や「ＡＩによる労働の代行」は現実のものとなり、人間社会はSociety 5.0の時代に突入しています。技術革新が高度化する一方で、人間としての生き方や倫理的課題は一層複雑化しています。こうした時代において、生徒一人ひとりが自律的な個人としてウェルビーイング（物理的・精神的・社会的な幸せと豊かさ）を実現し、持続可能な社会の創手となるための根幹を養うのが「道徳教育」の使命であると考えます。「見方が変わると、学び方が変わる。 学び方が変わると、生き方が変わる。」と思います。道徳科の授業は、生徒が直面する道徳的課題に対し、教師と生徒が共に向き合い、指導者自身の教材観・授業観（見方）が深まることで、発問や授業展開（学 び方）が変革され、最終的に生徒および教師自身の人間としての歩み（生き方）の変容へとつながるのではないでしょうか。全国の道徳教育を牽引する指導者・推進教員である皆さんには、本研修で得られた実践的指導法を各地域・各学校現場へ持ち帰り、道徳科授業の質の高まりに向けた実践的リーダーシップを発揮することを期待しています。





５　研修Ｈ

講演　考え、議論する道徳科の充実に向けて
講師　国立教育政策研究所教育課程調査官
　　文部科学省初等中等教育局教科調査官
　　大平　剛生　先生

講演では、次期学習指導要領の改訂に向けた道徳教育の検討状況を踏まえ、これからの道徳科を「考え、議論する道徳への転換」から、学校現場での確実な実践につなげる「考え、議論する道徳の実装」へ進めていく必要性が示されました。道徳の時間が特別の教科道徳として教科化され、小学校では平成30年度、中学校では平成31年度から全面実施され、おおむね10年を迎える現在、授業の質をさらに具体的に向上させる段階へ移ることが求められます。その背景には、生成ＡＩをはじめとするデジタル技術の急速な発展、ＳＮＳ利用の拡大、フィルターバブルやエコーチェンバーなどの情報環境の変化もあります。児童・生徒は情報の受け手であるだけでなく、情報を発信し、判断し、その結果に責任を負う主体にもなっています。したがって、このような時代において、人間としてどのように生きるかを考えること、自ら価値判断を行うこと、自分の判断に責任をもつことが一層重要になり、道徳教育の役割もこれまで以上に重要になっていくとお話しがありました。講演で示された調査資料等は、全中道研のホームページでも紹介させていただきます。最後には、文科省ホームページに公開されている道徳アーカイブのことについてもご説明がありました。



道徳教育推進教師育成講座〈受講者の声〉

○　学習指導案の作り方の道筋から二通の手紙の授業方法まで新しい発見の連続であった。大変勉強になりました。
○　道徳教育の評価について何を見とるか、次期学習指導要領に向けた基本的な考え方について、全体の中で学・道・総が果たす役割について等学ぶことができました。
○　とてもわかりやすく、なぜ道徳教育が必要か、授業での具体例が沢山あり、実践したいものばかりでした。ありがとうございました。
○　菅野先生のお話で、重層的に、立体的にという考え方がとても勉強になりました。
○　指導案作成について、改めてポイントを押さえられた。他グループの評価を聞くことで、今後の自分に活かせそうでした。
○　各グループに丁寧にお話をいただき、嬉しかったです。話し合う時に、自分の意見を言って終わりにしないでその考えにコメントする、なぜ？どうして？で問い返していく手法等、参考になりました。
○　生徒の身に付けさせたい力から、授業を構造的に作り、生徒の「分かる」から「実践」に繋げる考え方、非常に勉強になりました。
○　研修Ａでは、学習指導案作成におけるポイントを要点をおさえながらご指導頂けたので、大変貴重なお話でした。研修Ｇでは、授業後の指導講評として、班での前日での取り組んでいる様子等を踏まえたお話でしたので、ありがたいお話でした。
○　生徒への質問の発展の仕方がわかり、その上でさらに発問をすると、生徒がじっくり考えられるとわかりました。

○　授業づくりでは、主題・ねらいを明確にし、どの様相を育てたいかをしっかりと教師がもつこと。「人間の真実、よりよく生きる」にも広げられるような重層的な発問を作る。多面的・多角的に考えさせる。また、形成的評価という視点が必要であり、生徒の反応、生徒の変容を補助発問でつなげていく。

○　各グループの指導案や模擬授業でのポイントについて丁寧に講評してくださり、ありがたかったです。特にＢグループはWGで「検討中」の１教材複数時間指導について､チャレンジしたので勉強になりました。Ｄ２２「よりよく生きる喜び」で扱うことへの可能性について後押しいただけたことをメンバーの一人としてうれしく思います。

○　これまで指導を受けていた指導案の作成の考え方と違う方法について学ぶことができ、多様な指導案・授業づくりに非常に参考になりました。また、模擬授業後には、的確なフィードバックをいただき、さらに深めていく発問の出し方について学ぶことができました。

○　道徳的実践にいかに結びつけるか。道徳性を養う上で、どう考えを深めていくか。重層的に発問を仕掛けていくというのは発問を考える上で大きなヒントになりました。

○　学習指導案を作成するにあたっての手順が改めて確認できた。また、模擬授業の講評は自分たちでは気づかなかった部分までわかり、とても参考になった。道徳性の実装、というのがよくわからなかったので、さらに勉強をしていきたい。

○　今回の研修では､「二通の手紙」を通して、ルールを守ることの意味や、よりよく生きることについて考える道徳授業の在り方を学んだ。元さんの行動を善悪だけで判断するのではなく、その時の心情や葛藤に着目し、多面的・多角的に考えさせることの大切さを改めて感じた。内容項目の検討については、中学校の週１時間ということに留意し、内容の振り返り等を充実させ、繋がりのある授業を構想したい。また、発問やグループワークの方法、振り返りを具体的に工夫することで、生徒が自分自身の考えを深め、これからの生き方につなげられる授業づくりを意識していきたいと思った。

○　ＳＮＳの長時間利用やフィルターバブルの弊害など、子どもを取り巻く環境の変化が激しい時代だからこそ、道徳を実装し、多様な手法を柔軟に組み合わせて、学校全体で道徳教育を行っていくことの重要性を学びました。

○　ワーキンググループの資料がある事は知っていても日頃の業務の中だと読み切ることが出来ないため、要点を説明していただき、勉強になりました。ありがとうございました。

○　次期学習指導要領の動きや、実装についてご示唆いただけたと思いました。とても有意義な時間でした。

○　現状の子供達を取り巻く状況を踏まえて、道徳に求められるものについて考えさせられた。また、教えていただいた道徳教育アーカイブを今後の実践に活かしていきたい。

○　今後の学習指導要領の方向性が知れて勉強になりました。現在の道徳教育の在り方に大きな変更はなく、それをどう実装していくかというお話で安心しました。

○　現状の子供達を取り巻く状況を踏まえて、道徳に求められるものについて考えさせられた。教えていただいた道徳教育アーカイブを今後の実践に活かしていきたい。



○　道徳教育推進教師へ求められていることを再認識し、今後の流れも理解できました。
○　次期学習指導要領の内容を聞いて、数年後の道徳教育の見通しが立ち、また道徳は全ての教育活動の基盤になる物であることを、改めて認識することができた。
○　次期指導要領の改訂に向けて何が今、話題となり議論されているのか理解できました。日々の授業を頑張り子ども達のために授業づくりをするわけですが、目指す方向性がわかることが今後の参考になりました。ワーキング等の資料にも目を通して、より良い授業や道徳教育の実施に向けて地域に帰り、還元や実践をしていきたいと思います。
○　これまでの道徳とこれからの道徳を考えさせるきっかけになりました。また、動画も参考にして勉強しながら道徳授業、道徳教育を高めていきたいと思いました。
○　これからの道徳教育や道徳教育推進教師の役割や管理職の在り方についても具体的に学べました。サイトの事例についても紹介いただけたので、校内で共有していきたいです。
○　道徳教育推進教師として大切にするべきことが整理されていきました。道徳アーカイブを活用して自分自身も学校も道徳教育の充実を目指していきたいと改めて思えました。
○　今後の道徳のあり方について確認できた。新たな取り組みにもチームで挑戦できるようにしたい。
○　次期学習指導要領の方向性が分かりました。、また、複数時間を取り扱うことを実践で考えた時、学校を動かすことや、発信力の部分でも実践の部分でも自分自身に課題があるなと感じました。さらに、実装に向けた道徳教育推進教師の役割等を示していただき、身が引き締まる思いでした。

閉講式･会長挨拶

皆様、お疲れ様でした。昨日の講師の菅野先生のご指導を生かしながら、内容項目の選定や発問、展開、指導方法の工夫など、お互いに勉強になる有意義な二日間になったと思います。今後はそれぞれの地区に戻られて、この成果を各地区で広げていただくとともに、各地区の研究大会を盛り上げていただきたいと思います。そして、１１月に行われる全中道研東京大会で皆様方と再会できることを楽しみにしております。

講師の先生方、この度は、ご指導いただき、ありがとうございました。菅野先生に置かれましては初日の講義に続き、本日も１グループずつ丁寧にご指導いただきました。すべてのグループのよさを価値付けてくださり、励ましてくださったことに心よりお礼を申し上げます。また、文部科学省大平調査官におかれましては全国でご講演のあるお忙しい中、本研究会にご出席いただき心から感謝申し上げます。たいへんわかりやすいお話の中に、次期学習指導要領に関する内容もあり、私たちも考えが広がり、深まりました。授業実践についてのお話の中で、たくさんの新しい視点をいただきました。本当にありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。改めまして御礼申し上げます。

最後に、ご協力いただいた上廣倫理財団の皆様、そして、準備から運営まで尽力してくださった大川直樹事務局長、毛利慎治事務局次長をはじめ、事務局の皆さんに心から感謝しております。ありがとうございました。

